

〔例会報告〕

2007 年度第 2 回 JAMS 関東例会（2007 年 5 月 12 日）報告

**Memories and Realities of Cultural China: Malaysian Chinese and
Cross-Strait Relations**

ホウ・コク・チュン[HOU Kok Chung](マラヤ大学中国研究所)

レビュー執筆者：久礼 克季（立教大学大学院博士課程後期課程）

5 月 12 日、立教大学において本年度第 2 回目の JAMS 関東例会が開かれ、ホウ・コク・チュン[HOU Kok Chung](マラヤ大学中国研究所)による“Memories and Realities of Cultural China: Malaysian Chinese and Cross-Strait Relations”の報告が行われた。

本報告は、マレーシア華人層における自らの帰属意識や中国に対する国家の認識、台湾海峡問題への彼らの反応についてとりあげ、それぞれ連関させて検討したものである。

報告の中で、ホウは、上記の主題について次のことを指摘した。19 世紀末から 20 世紀初頭、清末から中華民国初期にかけての中国国内における混乱と、マラヤにおける港やゴム農園での労働者需要の増大から、中国からマラヤへの華人の移民が大規模に行われた。そしてこれに伴い、現地には数多くの中国語学校が設立される。このことに加え、この時期、清朝や中華民国の指導者層がマラヤやシンガポールを訪れ、現地の華人に中国の苦境を繰り返し訴えたことによって、当時から現地の華人の間には、中国に対する関心や自らの故郷は中国であるという意識が維持されることになった。その後 1957 年にマラヤ連邦が独立を達成した後、マラヤ連邦ならびにマレーシア政府と中華人民共和国とのイデオロギーの違いから、中国からの書籍に対し政府から厳しい検閲が加えられるなかで、台湾へ留学する華人が多く現れた。また 1970 年代前半それまでの英語教育からマレー語教育に政策が変化するなかで、マレーシアの華人は自分の子供の教育をマレー語、英語、そして中国語で受けさせた。このような台湾への留学や中国語教育のなかで、中国の古典や儒学、歴史を学ぶことによって華人たちは中国を文化的側面からもっとも強く捉えるようになる。そして、この文化的中国という考えが多くのマレーシアの華人たちに、全世界の華人について全て調和した関係があるべきという

考えを生み出した。このような考えが、その後の台湾海峡問題について、彼らが台湾独立に反対するという中国寄りの立場の見解をとらせることになる。このような見解は、特にマレーシアの各華人団体や華人協会のリーダーや華人系各メディアの首脳らに強くみられ、彼らの見解がそのメディアを通じて現地の華人たちに多く伝えられた。そして、近年のビジネス活発化を始めとするマレーシア－中国関係の緊密化を背景に上記のような中国寄りの立場からの意見は更に強くなり、今後もそのような意見は維持されていくものと思われる。

報告後に吉村真子から述べられたコメント、ならびにその後引き続いて行われた質疑応答では、若い世代の華人における台湾海峡問題の認識や、マレーシアの各華人団体や華人協会と中国ならびに台湾政府との関係、台湾海峡問題の議論におけるメディア利用、現在の華人教育の状況、マレーシアの華人間における冷戦やグローバリゼーションの認識、文化大革命の認識、といった多くの話題について活発な議論がなされた。

以上のことから、本報告は、マレーシアの華人における強い中国人意識の形成や展開、またそれに基づいた台湾海峡問題への彼らの反応や、対中国ならびに対台湾関係の構築と展開など、マレーシアの華人に関する非常に多くの興味深い内容を含んだものといえる。また、本報告における各事柄の分析は、今後マレーシア－中国ならびにマレーシア－台湾関係がどう展開していくかをみていくうえで、大変大きな手がかりとなる非常に意義の大きいものであるといえよう。

この研究をはじめ、今後この分野の研究が大きく進展することを期待したい。